

アッシリア帝国東部辺境を掘る

—イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・2021 年度の成果—

西山 伸一 中部大学人文学部教授

ハーシム・ハマー・アブドゥッラー スレーマニー博物館館長

山田 重郎 筑波大学人文社会系教授

沼本 宏俊 国士館大学体育学部教授

Excavating the Eastern Fringe of the Neo-Assyrian Empire: Yasin Tepe Archaeological Project (YAP), Iraqi Kurdistan, Research Results of 2021

NISHIYAMA, Shin'ichi Professor, College of Humanities, Chubu University

ABDULLAH, Hashim Hama Director, Slemani Museum, Iraqi Kurdistan, Republic of Iraq

YAMADA, Shigeo Professor, Faculty of Humanities and Social Sciences, University of Tsukuba

NUMOTO, Hiroto Professor, Faculty of Physical Education, Kokushikan University

1. はじめに

2016 年より始まった Yasin Tepe Archaeological Project (YAP) は、イラク共和国クルディスタン地域スレーマニー(スレイマニーヤ)県南部、シャフリゾール平原に位置するヤシン・テペ遺跡とその周辺を対象として考古学調査を実施している。コロナ禍は、他の調査団と同様私たちにも調査計画の大幅な見直しを強いた。しかし、幸運にも 2021 年度には短期のフィールド調査を実施することができた。その成果を簡単に報告する。

フィールド調査以外では、中部大学は昨年度に引き続き、令和 3 年度文化庁委託事業・文化遺産国際協力拠点交流事業「イラク・クルディスタン地域における文化遺産国際協力拠点交流事業」を実施した。この事業では、スレーマニー博物館および文化財局に対してさまざまな文化遺産に関する人材育成への支援、音声ガイドの拡充、ガイドブックの増刷などを行った。本来であれば、現地での人材育成研修やイラク人専門家の日本への招聘研修事業を計画していたが、コロナ禍により今年度も変更を余儀なくされた。コロナ禍は、日本の文化遺産国際貢献についても大きな転換点となったと思う。

さて、今回の調査期間は、2021 年 10 月 12 日から 10 月 31 日であった。2021 年になっても中東各地でコロナ禍は拡大していたが、その年の後半は、日本もそ

うであったように、感染状況が下火となっていた。その間隙をぬって調査は行われた。今回は、時間的制約から発掘調査ではなく、ヤシン・テペ遺跡周辺のサーヴェイおよび過去の調査で出土した考古遺物のサンプリングを実施した。来るべき本格的な発掘再開への準備シーズンという位置づけである。

2. 2021 年秋のクルディスタンの状況

調査成果について言及する前に、2021 年秋のクルディスタン、特にスレーマニー県の状況について簡単に言及しておきたい。2020 年後半になってクルディスタンの感染状況も下火となり、スレーマニー市の人々は日常を取り戻していた。ヨーロッパ各国の考古学調査団は、夏頃から続々と現地に戻ってきた。しかし、すべての調査団が戻ってきたわけではなかった。スレーマニー県では、イギリス、ドイツ、イタリアなどの調査団が長期の発掘シーズンを展開していた。いずれも 2020 年は調査が休止となった調査団であり、その遅れを取り戻すかのように精力的な活動を行っていた。一方、フランスやドイツの一部の調査団は、さまざまな事情から短期の訪問を余儀なくされていた。私たちの場合もしかりである。

2021 年 10 月 19 日には、IFPO(フランス近東研究所)とクルディスタン文化財総局の共催による第 2 回 Archaeological Research in Iraqi Kurdistan がエルビルで開催された。ここにはフランス、イタリアを中心



図1 ヤシン・テペ遺跡周辺の衛星画像とサーヴェイ地点(YP)。SSPはShahrizor Survey Projectで登録された遺跡。

とするヨーロッパ各国研究者が、コロナ禍以降おそらく初となる現地での対面によるワークショップに参加していた。

10月25日には、スレーマニー博物館においてイタリア総領事館とローマ大学の支援で新たな展示スペースがオープンし、盛大なセレモニーが実施された。また、2021年4月には文化庁と中部大学による支援で、スレーマニー博物館の展示品に関する音声ガイドが公開された。これは、イラクにおける博物館としては初の試みであった。このようにコロナ禍であってもクルディスタンの文化遺産保護活動が継続しているのは喜ばしいことである。

一方、現地の文化財局は、外国調査団の受け入れについて万全の態勢であったが、調査団によっては今シーズンも渡航を見送ったところが少なからずあった。このため、文化財局勤務の考古学者たちは、協働する調査団とオンラインでやり取りしながら調査研究を進めていた。しかし、やはり実際のフィールド調査に参加することはなにもものにも代え難いという意見が多かった。クルディスタンの考古学・文化遺産に関する協力や人材育成は、ようやく軌道にのってきたところである。今後とも状況に応じて、各国調査団によるさ

まざまな協力や支援が求められている。

3. ヤシン・テペ遺跡周辺地域の考古学踏査

私たちは、昨年度から高解像度衛星データを使用して、ヤシン・テペ遺跡周辺の景観研究を進めている。今回のフィールド調査では、その衛星データから読み取れる内容と現地での考古学情報の比較に重点をおいた。2019年夏季に予備調査としてコロナ衛星画像を使用したサーヴェイを実施し、衛星データの有効性が確認できた。2020年度には、高分解能衛星画像(0.3～0.5 m 解像度のデータ)ならびにAW3D高精細版DSM(0.5 m 解像度のデータ)を利用したヤシン・テペ遺跡周辺の景観分析を開始した。その結果、遺跡あるいは何らかの遺構と考えられる地点が、40地点以上確認できた。その内、今回のフィールド調査で確認したのは、28地点であった(図1)。

以前報告したように、高分解能衛星画像とAW3D高精細版DSMでは、それぞれ特徴があり、それが遺跡の見え方について長所・短所となっている。ヤシン・テペ遺跡周辺の場合は、後者がまず微高地を探索するのに使われ、高分解能衛星画像やコロナ衛星画像と比較することで、遺跡であることの確認を行った。



図2 YP1の全景(北より)。現在は畑となっており中央に段差がある。

しかし、最終的には現地に立って、遺物散布の有無やその他のフィーチャー(特徴)を見極める必要がある。

ヤシン・テベ遺跡周辺でこれまで SSP(Shahrizor Survey Project)によって判明している遺跡は、7件である(①Tell Bestansur/SSP6、②Tell Kajaw/SSP8、③Tell Marif/SSP3、④Tell Kara Göl/SSP21、⑤SSP4、⑥SSP5、⑦SSP75)。これ以外の平地や、微高地において遺跡と推定できる地点が少なくとも21地点あった。このうち明らかに遺跡であると確定できたのは、13地点であった。これらはいずれも新しく発見された遺跡である。時代は銅石器時代からイスラーム時代にわたる。他の地点は AW3D では微高地であるものの、現代に形成されたり、自然地形であることが判明した。

SSPによって登録された遺跡のうち、SSP6とSSP8では発掘調査により鉄器時代の存在が確定している。それ以外では、私たちの踏査成果を総合すると、SSP3、SSP4、SSP5、およびSSP21において鉄器時代の居住があり、ヤシン・テベと同時期に集落が存在した可能性が高い。

新たに同定された遺跡として重要なのは、まずYP1である(図2)。これはヤシン・テベの約200m北西に位置し、表面にはレンガ片を含む土器片など多くの遺物が散布していた。時代は、青銅器時代(中期～後期)に遡り、鉄器時代、サーサーン朝時代、イスラーム時代の居住が認められる。規模は1ha前後で、周辺地との比高差は約2mである。現在は遺跡全体が農地となっており、農作業で削平された部分も多いと考えられる。

またヤシン・テベの南西では、YP22が新たに見つ



図3 YP22の全景(南より)。遺跡の南方には水汲み用の穴が掘削してある。



図4 YP16の全景(南より)。

かった(図3)。SSP4、SSP5とあわせるとヤシン・テベの南方には1ha程度の集落が3件存在していたことになる。これらの集落は、都市周辺の農地を管理するとともに、都市を防御する役割もあったと考えられる。

今回、最も古い居住が認められたのは、SSP8の約800m東に位置するYP16(Gori Gowri 遺跡)である(図4)。おそらくSSP75に相当すると考えられる。遺跡は比高差約2～3mのテルであり、規模は1.5ha程度である。表面には、後期銅石器時代の土器片(ウルク後期併行期)が多量に散布する。また青銅器時代、鉄器時代、イスラーム時代の土器片も確認できる。今回踏査した遺跡の中では、最も明確に後期銅石器時代の居住が確認できた遺跡である。

今回は、残念ながら新石器時代以前の遺跡は確認できなかった。この時代に遡る遺跡がヤシン・テベ周辺でほとんど見られないのは、その東に広がる扇状地から流れ込む堆積土によって古い時代の遺跡が埋もれてしまったことが一因と考えられる。ヤシン・テベでも新石器時代の遺物が採集されているが、その文化層は

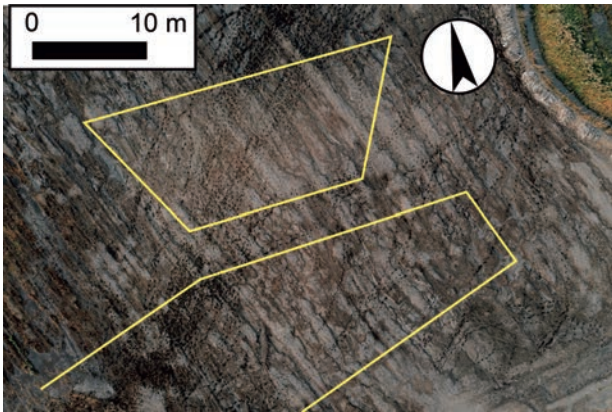


図5 YP14の空中写真。中央部の土壌の色調が異なる。衛星画像での判読は西山ほか2021:23図6を参照。

地表面の遙か下に埋没していると思われる。しかし、条件がよければ Bestansur 遺跡のように比較的浅い深度で新石器時代に到達することもある。興味深いのは、ヤシン・テベの東に広がる扇状地では、遺跡がほとんど見つからないことである。衛星データによる遺跡の候補地を数か所踏査したが、いずれも遺跡ではなかった。扇状地は、タンジェロ川に向かって傾斜しており、このような場所では集落の形成は困難であったのかもしれない。

今回の調査で「遺跡」と認定したものの中で、遺物の散布がほとんどないものもあった。その代表が、YP14である(図5)。この地点は、昨年度報告したようにコロナ衛星画像や高分解能衛星画像において「水門」のような2つの多角形を呈する遺構が確認された場所である。AW3Dでは、この地点は平坦であるため遺構が認識できていない。現地に行ってみると確かに地表面は平坦ではあるが、多角形の部分の土壌が周辺と異なる色調をもっていることが判明した。ただ、地表面には土器片を含む遺物はわずかしき散布してなかった。遺物が非常に少ないため、遺跡と認定するには二の足を踏むが、生活の痕跡がなければ土器片がほとんど採取されないこともある。今後、機会をみてYP14に試掘トンチを入れてみる価値はあると思う。

最後に、タンジェロ川の南側の地域は時間的制約から踏査することができなかった。このエリアは、衛星データからライン(直線)状のソイルマークが複数確認できる。これらのソイルマークは、タンジェロ川に注ぐ人工水路の可能性がある。ヤシン・テベの周辺では、タンジェロ川にむかって北と南のそれぞれの方向から標高が低くなっており、川への排水を目的とした水路を作することは容易であったろう。今後、機会を見てこ



図6 アクロポリスの「北西門」正面部分。モルタルを使用した石組みで建造。



図7 「北西門」の側面(西より)。

れらのソイルマークが何かを明らかにし、ヤシン・テベ周辺の水利事情を明らかにしたい。このことは、ヤシン・テベの市内運河と遺跡周辺の人工水路(運河)の関係に新たな光を当てることになるだろう。

4. アクロポリスの調査

ヤシン・テベの中心にはアクロポリスのマウンドがあり、そこには四つの城門らしき痕跡が確認できる。そのうち石組みの建造遺構が立っているのは「北西門」だけである(図6~7)。この遺構は年代もさることながら、本当に「城門」なのかどうかの検討もまだ行われていない。石組みの方法やモルタルの使用などから後期サーサーン朝から初期イスラーム時代と推定されるが、確たる証拠はない。ヤシン・テベは、イスラーム時代のクルド人の都市「シャフリゾール」に同定できるとも考えられており(G. Le Strange)、この時代の研究もイラク・クルディスタンの地域史の理解に重要な貢献をするものと考えられる。

今回は、「北西門」の石組み壁の周辺を清掃し、フォトグラメトリーにより3Dデータを作成した(図8)。



図8 「北西門」のフォトグラメトリーによる3Dデータ。

これにより図面を作成し、来るべき本格調査に備える予定である。ちなみに、この建造遺構は、クランク状の通路をもち、ヴォールト天井をもつ部屋が2つ並列するという特徴的な形態をもつ。今後、建築学的研究も進めてゆきたいと思う。

5. ヤシン・テペ遺跡出土遺物のサンプリング

現地において2016年から2019年の発掘調査で出土した考古遺物、自然遺物の分析用資料のサンプリングを行った。出土遺物のうち重要なものは文化財局の倉庫に保管されており、数日間かけて炭化物、動物遺体(貝類、脊椎動物)、土器片、植物遺体、スラグ類、ブリック(焼成レンガ)、墓室内土壌などから資料を採取した。なお、人骨資料のサンプリングについては、共同研究者と現地で議論しながら採取する必要があったため、今回は見送った。これらの資料の分析は、主に日本で実施する計画である。

6. まとめと展望

2021年度は、幸いにも短期間のフィールド調査を実施することができた。しかし、本格的な発掘調査の再開まではいましばらく時間のかかるものと思われる。したがって、その間、これまでのデータを分析することで、できるだけ研究を前に進めていくとともに、現地との協力体制を維持していきたい。

今回は、ヤシン・テペ遺跡周辺の景観復元を目的としたサーヴェイを実施した。高解像度の衛星データにより、現地に渡航する前にある程度の遺跡の候補地を推定できたことは、踏査の進展を迅速化する点で大きな効果があった。ヤシン・テペ周辺では、鉄器時代を含む1ha程度かそれ以下の集落が数多く形成されて

いたことが明らかになった。今後、表採遺物の分析を進め、詳細な居住年代を明らかにしていきたい。またサーヴェイでは遺跡分布に関連する地形学的・水利学的データも収集できた。今後は、試掘や地下探査の実施も視野にいれつつ、ヤシン・テペ周辺の景観復元研究を進めていければと思う。

また現地で取得した分析資料については、日本で分析を進めることでヤシン・テペの研究を少しでも前進させたいと思う。そして他の調査団同様、一日も早い発掘調査の再開を願わざるを得ない。

本プロジェクトは日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)「境界域に着目した古代西アジア帝国の支配形態と構造解明を目指す歴史考古学的研究」(代表: 西山伸一)(課題番号20H01328)、萌芽研究「考古学・地理情報科学の融合からみる文化財の新たな記録システム構築に向けた研究」(代表: 西山伸一)(課題番号21K18384)、基盤研究(B)(海外学術)「古代メソポタミア北東部における歴史考古学的研究」(代表: 沼本宏俊)(課題番号18H00743)、および新学術領域研究(研究領域提案型)「都市文明の本質」計画研究A02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」(代表: 山田重郎)(課題番号18H05445)の支援を受けた。

また共著者以外では、渡部展也(中部大学)、黒澤正紀(筑波大学)、Jeanine Abdul Massih(レバノン大学)、Mouhamad Abdel Sater(レバノン大学)、Nesrine Aad(レバノン大学)をはじめYAPの構成メンバーからさまざまな協力をいただいたことに深く感謝致します。また、いつも変わらぬ全面的サポートをいただいているスレーマニー文化財局局長Kamal Rasheed Raheem氏をはじめ文化財局やスレーマニー博物館職員の方々にも厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・ Nishiyama, S. 2020 Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire: A view from Yasin Tepe, Iraqi Kurdistan. In: S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries*, 45–72. Wiesbaden, Harrassowitz.
- ・ Yamada, S. 2020 The conquest and reorganization of the land of Zamua/Mazamua in the Assyrian Empire. In: S. Hasegawa and K. Radner (eds.), *The Reach of the Assyrian and Babylonian Empires: Case studies in Eastern and Western Peripheries*, 167–193. Wiesbaden, Harrassowitz.
- ・ Yasin Tepe Archaeological Project (Japan). 2021 *Yasin Tepe Archaeological Project (YAP): Field Report of the 2021 Season*,

Slemani, Iraqi Kurdistan (Submitted to the Slemani Directorate of Antiquities, October 2021).

- ・西山伸一・常木晃・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・沼本宏俊・山田重郎・渡部展也 2017 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・第1次(2016年)」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』16-20頁 日本西アジア考古学会。
- ・西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・常木晃・山田重郎・沼本宏俊 2018 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・第2次(2017年)」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』17-21頁 日本西アジア考古学会。
- ・西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊・常木晃 2019 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イ

ラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・第3次(2018年)」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』109-113頁 日本西アジア考古学会。

- ・西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2020 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・第4次(2019年)」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』21-25頁 日本西アジア考古学会。
- ・西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・山田重郎・沼本宏俊 2021 「アッシリア帝国東部辺境を掘る—イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ考古学プロジェクト・2020年の進展」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』20-25頁 日本西アジア考古学会。